



言語技術教育の詳細を紹介

教科横断の指導体制で、 すべての学びの土台となる力を育む

東京都・私立芝浦工業大学附属中学高校

2009年度から、日本語の4技能を鍛える「言語技術」の授業を実施している東京都・私立芝浦工業大学附属中学高校。話型を身につけるための「問答ゲーム」やディベートなど、授業の概要をVIEWnext 高校版4月号でお伝えしました。

本記事では、さらに詳しい授業の内容と、指導体制、今後の展望について、引き続き、言語技術科主任の白鳥新先生にお話しいただきました。

VIEWnext 高校版4月号「誌上で見学 学びのnext」は[こちらをクリック](#)

本記事の コンテンツ

- 1 授業内容と学習評価** 生徒が多くの活動を経験できるよう、1クラス20人の授業に
- 2 指導体制** 専門の教科を超えて本科目を担当。多様な視点で授業をつくる
- 3 成果と展望** 学習成果を生かし、探究学習との相乗効果を生み出す

言語技術科主任

白鳥 新

しろとり・あらた

教職歴10年。同校に赴任して4年目。国語科。



学校概要

◎育成を目指す人物像は、「科学技術を通して世界に貢献できる技術者・研究者」。STEAM教育や大学との連携教育、グローバル教育などを軸に、理工系教育に力を入れる。以前は男子校だったが、高校は2017年度に、中学校は21年度に共学化。

設立 1922(大正11)年

形態 全日制/普通科/共学

生徒数 中学校1学年約160人/高校1学年約200人

2020年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、宇都宮大、埼玉大、東京外国語大、東京農工大、横浜国立大などに18人が合格。私立大は、慶應義塾大、芝浦工業大、上智大、東京理科大、早稲田大などに延べ202人が合格。

URL <http://www.ijh.shibaura-it.ac.jp>

※プロフィールは、2021年3月時点のものです。

1 授業内容と学習評価

生徒が多くの活動を
経験できるよう

1クラス20人の授業に

本校では、2009年度から、日本語の「話す・聞く・書く・読む」を体系的に学ぶ授業を、「ランゲージアワー」という科目で行っています。つくば言語技術教育研究所の指導に基づき、論理力・伝達力・分析力の育成を目指した活動が授業の軸となります。当初は、中学3年次と高校1年次で授業を行っていましたが、論理力・伝達力・分析力は、他教科・科目における学習の土台となる資質・能力であると考え、6年前、対象を中学1・2年次に変更しました。

授業では、「問答ゲーム」「再話」「情報伝達」「絵の分析」など

の活動を行います。例えば、「問答ゲーム」は、「結論を言ってから理由を説明する」といった話型を学ぶ活動です。その話型を基本として、理由を支える根拠となる具体例や対比などの示し方を学んで、論理的に考えを伝える力を高めていきます。本科目は、国語というより実技教科に近い学習内容だと捉えており、生徒一人ひとりがしっかり活動を積み重ねることが重要になります。そのため、活動量をより多くしようと、2019年度からは、1クラスの生徒数を他の授業の半分の約20人にして授業を行っています。

学習評価は、基本的に、毎授業の最後を書く作文で行います。それは、授業で学んだ技術の定着を図るために書くもので、提出された作文は、担当教師が朱筆を入れて生徒に返却します。そして、次の授業の冒頭に、採点の観点と、そのクラスで評価の高かった作文を紹介し、生徒が自身の作文と比べて振り返りができるようにしています。

加えて、中学1年次には、「制服は必要か否か」というテーマの作文を、年度初めと年度末に書きます。同じテーマで自分が書いた2つの作文を見比べて、自身の成長を実感できるようにしています。その作文は、教師にとっても授業の成果を確認する機会になっています。年度初めは、自分の意見を持たず、「どちらとも言えません」と書かれた作文が多く見られますが、年度末の作文では、自分の意見を明確に示し、論理的な文章が書けるようになります。

中学2年次の最後には、本科目の集大成としてディベートを行います。ディベートには、メタな視点で自分の意見を構造的に捉えた発言が求められることや、結論・理由・理由を支える根拠の3つを意識して発言を組み立てることなど、2年間の授業で培ってきた力を発揮する場面が多くあります（写真1）。

2020年度は、コロナ禍の影響で例年通りに授業を進められなかったこともあり、ディベートでの生徒の様子を見ると、自分たちが一生懸命調べた内容を発表することばかりに意識が向き、調べた内容をエビデンスとして論理的に意見を組み立てて述べることに重点が置かれていませんでした。フィードバックではその点を伝え、本科目で身につけさせたい論理力・伝達力・分析力とは



写真1 3～4人が1チームとなり、「救急車の利用の有料化」「刑事事件での加害者の実名報道」などのテーマについてディベートを行った。テーマは班ごとに割り振られ、担当するテーマについての調べ学習を冬季休業中にしておき、それらを持ち寄ってメンバーで話し合い、論を組み立ててからディベートに臨んだ。

何かを意識させるようにしました。

2 指導体制

専門の教科を超えて 本科目を担当。 多様な視点で授業をつくる

本科目を担当するのは、言語技術科主任の私と、様々な教科の教師4人の計5人です。私以外の教師は数学科、社会科、国語科といった専門の教科の授業と兼任しており、人にもよりますが3年程度で言語技術科を離れます。これまで、美術科や体育科などの教師も本科目を担当してきました。

専門外の授業を担当するため、担当者全員による打ち合わせを週1回、授業前後の打ち合わせを学年ごとに週2回行います。授業前の打ち合わせでは、各担当者が考えてきた教材を出し合い、授業の内容や指導の観点を検討します。目線合わせを必ず行うので、教師によって指導に違いが生じることはありません(写真2)。授業後には、生徒の様子などを踏まえて本時の成果と今後の課題について話し合い、授業づくりに生かしています。本科目を初めて担当する教師は、つくば言語技術教育研究所で言語技術に関する基礎を学ぶ研修を受け、事前に本科目の授業を見学します。

また、様々な教科・科目の教師が担当することによって、授業づくりや学習評価の観点が多様になっています。例えば、数学科の教師からは説得力のある意見の述べ方を公式化するというアイデアが出され、社会科の教師からは史料の分析というアイデアが出されたりして、それぞれ授業に反映されています。

そして、本科目での指導を通じて、教師も言葉への意識や考え方が変わっていきます。その一例は、私自身です。「言語技術」の担当となって、文章をより構造的に捉えて読むようになり、生徒への指示は結論を伝えてから説明するようになりました。

シラバスは年度当初に作成しますが、授業の具体的な内容は、毎週の打ち合わせで見直し、生徒の到達度や志向などを踏まえて柔軟に変えています。例えば、グループワークがうまくできていない時には、話し合いの仕方を学ぶ活動を取り入れました。また、大学入学共通テストを見ると、どの教科・科目でも図やグラフなどから情報を読み取って解答する問題が出されています。そこで、本科目でも教材の中で図やグラフなどを扱うようにしました。



写真2 同科目は複数の教師が担当するが、授業前の打ち合わせで指導の目線合わせをしているため、授業中、気になる生徒に声をかけ、個別に指導する場面でも、その内容にぶれが生じることはない。

3 成果と展望

学習成果を生かし、 探究学習との相乗効果を 生み出す

年度末に近づくにつれて、授業で多くの生徒が自分の考えを論理的で明確に表現できるようになることが、本科目の成果です。例えば、ディベートの授業では、説得力のある論を展開しようと、発表直前まで発表内容を練る生徒の姿が見られます。また、生徒に勝敗の判定の理由を聞くと、主張を論理的に捉えて判断していることが分かります（写真3・4）。

年度末に行う生徒への授業アンケートでは、「授業で学んだ技術が役立ちそうなのはどんな場面ですか」という設問に対し、「会議や討論の場」「他者とのコミュニケーション」「作文やレポート作成」といった回答が60～70%を占めます。本科目のねらいの1つである他教科・科目の学習の土台を築くことにも寄与していると捉えています。

今後の課題は、そうした成果を生徒がもっと実感し、様々な場面で学習内容を生かせるようにすることです。本校は、2017年度の高校の共学化に続き、2021年度、中学校を共学化し、カリキュラムを問題解決型授業や探究学習を重視したものに一新しました。本科目で身につけた論理力・伝達力・分析力を探究学習などで発揮し、そこで鍛えられた力を本科目の学びに生かすといった相乗効果をいかに生み出していかは、今後の課題です。

また、本校の2021年度中学校入試において、「言語技術」を入試科目に課した特色入試を導入しました。受験科目は、算数を必須とし、英語または「言語技術」のどちらかを選択としました。出題は、物事を分析的に捉え、論理的に考えられるか、自分の頭で発想をし、それを言葉で表現できる感覚を持っているかなど、論理的思考力、分析力、発想力、表現力を総合的に測る内容でした。募集人員は15人と、数は多くないですが、本校の特色ある教育をけん引する力を秘めた生徒を受け入れたいという思いがあります。本科目の授業で育まれる資質・能力の重要性を認識しているからこそ、特色入試の導入に踏み切ったと言えます。

そうした動きからも、本科目を本校の重要な教育活動の1つと捉え、今後も改善を図っていきたいと考えています。



写真3 ディベートの授業では、発表直前まで、メンバーと主張の内容とエビデンスをどのように展開するかを話し合っていた。



写真4 ディベートの判定は、「問答ゲームの形になっているか」「説得力はあるか」などの項目で採点。発表者の意見を記録し、客観的・批判的な視点で点数をつけていた。